

【紹介】

Photographic Art by Yorozyua
Yohaku and Ramona du Houx
Paul Cornell du Houx ed.

*Coastal Maine in Words and Art:
Gallery Fukurou's Reflections by
Maine Writers, 2019*

Rockland: Polar Bear & Company, 2019 年
112 頁、18.95 米ドル

国際ファッション専門職大学
山本雅男

はじめに

書籍のジャンルに画文集というのがある。文筆に心得のある画家が自作に文章を併せ、絵と文双方に手練の芸を披露するものだ。加山又造や熊谷守一、堀文子、小磯良平、岡本太郎、東山魁夷などがいるし、遠くは藤田嗣治なども挙げられる。

もちろん、その逆も真で、文章家で作画に手を染めた達者もいた。武者小路実篤は独特な絵筆に、格言めいた短句を付け合わせていた。山岳紀行文に洒落た挿絵をつけて独自の境地を定着させたのは串田孫一だった。

ここで紹介する作品集には 23 点の写真映像が載っており、それぞれにエッセイや物語が 1 点ないし数点が添えられている。これは、画文集ならぬ「写文集」の一冊となっている。ただし、それらはランダムに集められたものではなく、一貫したテーマは、アメリカのメイン州それもある町限定という地方色あふれる映像であり、小文になっている。そこが他書とは明らかな違いである。

成立の事情を、編者の「まえがき」からみてみよう。

芸術の作家と評論家は別物。そして、市井の鑑賞者もまた別のところにいる。「フ

クロウ」という日本語の響きを耳にすると、どういうわけか、あの梟の鳴き声が聞こえてくる。梟といえば、西洋世界で育った人なら、ギリシャ神話のアテーナ、別名ミネルヴァを思い起こすだろう。ただ、梟は芸術ばかりでなく多くの文化表象で出てくるものだ。メイン州は海沿いも内陸も、むかしから世界と交易や文化の往来が盛んだった。ハーマン・メルヴィルはメインの森から現れて、南太平洋へと旅する人びとを『タイピー (Typee)』¹⁾に書いているし、ニール・ロールドも『世界のなかのメイン (Maine in the World)』²⁾で、この州のさまざまな姿を描いている。だから、ムース<アメリカヘラジカ>と同様、梟も、けっして場違いではないといえよう。ところで、最近、ロックランドの町に「ギャラリー・フクロウ」が開設された。そこで催された写真展の作品を参考に、地元のポーラー・ベアー社が 800 語程度でエッセイ、物語を募集することになった。

どれくらいの応募があるか、思いもよらなかったのだが、予想外にも 88 本の原稿が寄せられたのだった。どの作品も無報酬にもかかわらず創造性豊かな内容ばかりで、わたしとしては、「寄稿者」という言葉がいつべんに好きになってしまった。寄稿者には深く感謝している。これらの応募作を選定し、出版にこぎつける苦労もあったが、選定に関してはお許しをねがいたい。もっぱら考えていたのは、写真展の作品にどれくらいインスパイアを受けて執筆したのか、できるだけ多くの原稿を探すということばかりだった。ご覧いただくと分かるように、写真作品と、いささか距離のあるものもあった。こうした試みやサイン会などは、これからも続けて行こうと考えている。もとは文芸として上質のものをというコンテスト、競作の意図はあったのだが、

穏やかなスタンスに変わっていった事実がある。ソロン・センターや関連する取り組みについては、SolonCenter.org や ProtectingAmerica.net にもお越しのほどを。

アメリカ合衆国メイン州は東海岸の北部、ニューイングランド6州のひとつである。南をニューハンプシャー州に接し、北の境界線は隣国カナダとの国境である。

北緯 45 度前後に位置するから、日本でいえば北海道、それも北端あたりにほぼ相当する。‘pine state’(松の州)と通称されるくらい、州全体にわたり松の深い森が広がっている。

複雑に入り組んだ海岸線、その南寄りのところにロックランド (Rockland) という、人口 7000 人ほどの町がある。風光明媚な海浜風景が観光客を引き寄せ、一方、近年はさまざまな芸術家が移り住む、アート・ヴィレッジの様相も呈している。

町の中心街から 1 マイルほど南に下った、海を遠望する住宅地の一角に「ギャラリー・フクロウ (Gallery Fukuroou)」がある。このギャラリーで開催された写真展、そこに出品された写真作品が本書に掲載された画像の数々なのである。

作品はぜんぶで 23 作。モノクロが 9 作、カラーが 14 作である。作者はモノクロ作品をヨロズヤ・ヨウハク (Yorozuya Yohaku) が、カラー作品をラモナ・ドゥー (Ramona du Houx) がカラー作品を撮っている。

いずれも、ロックランド周辺の海浜風景に材を採っている。ただし、カラー作品のほうは、撮影時およびその後のプロセスで大胆な加工が施されており、なかには、印象派絵画や抽象画を思わせる作品もある。

全編は 22 章に編集、公正されており、それぞれに章題がついているが、これは、展示会のさいに各作品に付されたタイトルである。

各章のタイトルおよび撮影者名

(Y=Yorozuya、R=Ramona) と、それに対応した文章作品をあげてみよう (作者名は省略)。

1. Eagle Rise (R) Sailing
2. Vanishing Point (Y) Jatty. Time
3. Moonstuck (R) Romancing the Moon. Slipstream of the Moon. Tir na nOg, the Sea
4. Owls Head Light (Y) Every Light Casts a Shadow
5. Tree Sails (R) Official Pronouncement. Early Morning Sail
6. Owls Head Sea (Y) A July Day in Maine
7. Free Flight (R) Like Butterflies Reaching for the Shore
8. Seaweed Waterfront (Y) Waterfront
9. Sunrise (Y) Moonrise
10. By the Sea (R) Waves Have No End. Adrift at the Beach
11. Brekwater Light (Y) Walking the Breakwater
12. Emerge (R) The Regatta
13. Home (Y) Alone Not Lonely. Under the Porch
14. Sails (R) Heaven's Gate
15. All Heads on Deck (R) The Slip Osprey
16. Embrace (R) Waves Remember
17. Seaweed Lawn (Y) Returning
18. Buoys (Y) Retirees
19. Sailing Lift (R) The Siren in the Deep
20. By the Sea (R) Sea Sprit
21. Contrast (Y/R) Seasons of Maine
22. Supermoon (R) Plotting a New Course

編者の「まえがき」にもあったように、写真展の各作品から構想を得て書かれた文章なので、画像との距離感はさまざまである。もとより、撮影者の創意思図と文章表現者のそれとはまったく別で、企画も自由発想を計って寄稿を募ったはずだ。ここに本書の特異なところがある。

映像にしる文章にしる創造の発意はおなじ

でも、表現形態、メディアの在り方が異なるということだ。百万言を尽くしてもなお語り遂せないものを一枚の画像が一瞬にして伝えられる。他方、一枚の画像は物事を如実に表してくれるが、言葉のもつ多義性、想像性には一步をゆずる限界がある。おなじ対象を異なる媒体で表現するという、本書の試みは大いに評価しなくてはならない。

今回は 88 本の寄稿があったという。どれも市井の人びとであるから、おそらく玉石混交、主題をふくめ文章の優劣もかなりの隔たりがあったろう。選定者の苦勞がしのばれる。それだけに文章創作にかけては、いわば素人の作品とはいえ、ここに掲載されたからには一定の鑑識眼を経たものと認めてよい。

すべてを紹介することはできないが、一点ばかり覗いてみよう。

“Owls Head Light (アウルズヘッド灯台)”と題された映像は、深い木立の向こう、やや小高い上方に、灯台の上部だけが見えるモノクロ作品。黒々とした叢林と真白い灯台のコントラストはモノクロならではの画面となっている。灯台の塔も全貌ではなく、上の一部だけが木立の上に表れているのも抑制が効いて印象的だ。

これに添えられた一文“Every Light Casts a Shadow”(どの灯りにも陰がある)は、「あの灯台に近づいちゃだめよ」という祖母の一言からはじまる。

幼いころ、祖母の家に行くと、メンソールとタバコの匂いがする祖母から、くどいほどその言葉を聞かされた。むしろ、それを耳にするたびに、台所の窓から見える灯台に行ってみたい、上ってみたいという思いが深まった。9 歳のある日、そのチャンスが訪れ、勇を鼓して探検することになった。

満足し、高揚した気分で戻ると、すかさず祖母に腕をつかまれ、「あそこに行っちゃいけないと言ったでしょ。あそこには暗闇があるのよ!」と強く詰問されることになった。その後、母の話してくれたことによると、祖

母は若いころ、灯台守のエリアス・ピケットと付き合いがあったという。あるとき、二人で歩いていると、エリアスが懐中時計を取り落とし、それがもとで崖から落ちて亡くなったのだと。

後年、祖母がホームに移ったあと、部屋を整理していると、机の引き出しから一個の懐中時計が出てきた。そこには、EP のイニシャルが刻まれていた。祖母の口癖が一気に甦るとともに、深い謎の正体も氷解しつつ、祖母の嘘も明らかになってしまった。そして、誰に知られることなく、そっと時計を廃棄してしまうのであった。

この物語が実話なのか、はたまた創作なのか、それは問うまい。ただ、タイトルにある‘Light’が、画像の灯台 (Lighthouse) に由来すること、祖母の話にある暗闇が‘Shadow’というタイトルに呼応していること、などに素人書き手の素朴さを感じないわけにはいかない。

ほかにも地元感と地元愛にあふれる作品が散見される。日本にも郷土色豊かな出版物があることは知られているが、写文集のような形のものがあるか寡聞にして知らない。

ともあれ、映像表現と文章表現とを併載するというユニークな企画は成功している。くわえて、メイン州ロックランドという限定された地域に、すべて題材を得ており、これは地元の人びとにとっては膝を打つような喜びであることは間違いない。

編者の言によれば、こうした試みは向後も続けてゆくという。さらに意欲的な展開や作品が期待できる。

最後になったが、この企画の舞台となった「ギャラリー・フクロウ」の創立者でオーナー、ヨロズヤ・ヨウハクの日本語表記は「萬屋鷹伯」。国際ファッション専門職大学ファッションクリエイション学科、鈴木孝史教授の写真家としての名跡である。

〈注〉

- 1) ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891)、アメリカの作家。『タイピー (Typee: A Deep at Polynesian Life)』 [1846]。
- 2) ニール・ロールド (Neil Rolde, 1931-

2017)、アメリカの作家、政治家。『世界のなかのメイン (Maine in the World: Stories of Some of Those From Here Who Went Away)』 [2009]。